

...遊歩道...

クリエイティブディレクター
マニグリエ真矢

来日して20年になる。さまざま
まな日本文化に興味があるが、
パリジェンヌとしては、先進国
で唯一伝統衣装として今も生
きている着物に大いなる関心
を抱いている。着付けて7年。
ファッションの新たな領域を
見つけるのはこのうえなく楽
しい。
着物について、まず、「知る」
ことから始めてみた。この伝統
的な衣装を知れば知るほど、「ロ
ード、シンボル、さらに、日本
文化独特の無言のメッセージが
込められていることがわかって
きた。仕事関係であれ、知人で

月にウサギがない

あれ、訪ねる日時、場所、相手
によって、季節感、遊び心、お
しゃれの度合いなどを自分なり
の着こなしで表してみる。自分
の伝えたい思いが、先方にも伝
わったときの喜びを共有したい
がためでもある。
着物歴3年目、中秋の名月の
イベントが日仏文化会館であ
り、着物で出向いた。帯は月の
満ち欠けの模様を、根付けには
ウサギをあしらった。
道すがらはたと気が付いた。
フランスでは、月にウサギが住
んでいるという発想がない。ウ
サギで各月に思いをほせてくれ

るだろう、という私のメッセ
ジは通じないのだ……。
着物を国際交流のツールに、
と願う私は重要な課題を見つ
けた。あうんの呼吸、暗黙の了
解というのは、日本の素晴らしい
文化だ。着物を含めて、すて
きな日本文化がフランスでも
理解されるよう努めていきたく
い。
.....
まにぐりえ・まや パリ出
身。パリ大学で日本文化を専攻。
89年に来日し日仏両国で芸術文
化事業を数多く手がけている。
仏政府対外貿易委員会委員。

...遊歩道...

クリエイティブディレクター マニグリエ真矢

着物で外出し始めて、まずぶ
つかった壁は、どう美しく振る
舞つかという点だった。
洋服文化で育った私には、着
物への「記憶」や「残像」がな
い。現代の日本では、着物を着
見かけることが少なくなったと
はいえ、祖父母や映画、演劇な
どを通じて無意識にでもその姿
は目に入っていることだろう。
それゆえ、立ち居振る舞いも
記憶に刻まれていて、いざ自分
が着る段になると、その残像が
実は大変役に立つのだ。
靴をはいていない姿、長い袖
の振りなど一つ一つが新鮮であ

内股？ 外股？

りながら、自分で見つけなくて
はならない動きだった。究極の
美しいポーズや所作を求め、身
に着けるために日本舞踊を習っ
てきた。
パリでダンス教室に子供の時
から通った私は、クラシックか
らアクロバチックロックまで幅
の広いダンスが大好き。西洋の
ダンスの基本として教えられる
のは、つま先を外に向けて膝を
伸ばし、胸を張って立つ姿。パ
レリーナのポーズを想像してい
ただくと分かりやすいかもしれ
ない。
これはすなわち「外股」。対

して着物の基本は「内股」。日
本の美、フランスの美、それぞ
れの姿の基本だが、この正反対
の姿勢に驚き、常に意識するこ
とは結構難しい。意識しないで
できるまで、お稽古、お稽古の
連続だ！
そんな一つ一つのディテール
の積み重ねによって、着心地の
いい動き、調和の取れた美しい
姿ができあがるのだと再認識し
た。
フランス語と日本語を使い分
けているように、洋服のエレガ
ンスと着物の所作が自然とでき
るレディーになりたい。

...遊歩道...

クリエイティブディレクター マニグリエ真矢

日本の美意識は隠れたところ
にこそある、とはよく聞か
れた。初めて着物に身を包ん
だ時のこと。何の予備知識も
なかったが、究極のおしゃれ
をするんだ、とすてきな気分
になったことを思い出す。
ところが、ところが……。
期待で膨らんだ胸が、まる
でお菓子のスフレのように、
一瞬にしてしぼむことになっ
た。渡された肌襦袢が入院時
のガウンにしか思えず、想像
していたものとあまりにもか
け離れていた。
そのせいで、日本のトップ

着物の下には

クラスのおしゃれってここか
ら始まるの。と最初は首をか
しげたものだ。
ランジェリーからおしゃれ
をするパリジェンヌには納得
がいかない！ そう思い込
み、着物の先輩たちにいろい
ろ尋ねてみた。そのうちに、
着物の内側には隠された秘密
があることがわかってきた。
下着が二重になっていたの
だ。肌襦袢は長襦袢の下に身
に着けるもの。長襦袢は、半
襦袢と裾除けが合わさってで
きたものらしいが、長い時間
の中で洗練され、おしゃれの

アイテムになった。長襦袢の
装飾性が高まるにつれ、それ
を汚さないように肌襦袢を下
に着けるようになった。そん
な話を聞いているうち、日本
の方がよほど下着に気を使っ
ているのかもしれないと思
えてきた。
本来、こういう見えないと
ころにこだわるのがおしゃれ
の原点だ。上辺にはかり目が
行きがちで、その内側を大事
にするという意識はともすれ
ば薄れがち。着物を通して改
めて日本の美意識に触れた気
がする。

...遊歩道...

クリエイティブディレクター マニグリエ真矢

私が鼓を習い始めたころ、よく指摘されたのが言葉遣いだった。「今日の練習」と言ったら私に「お稽古よ!」と。歳月を経て、外国人の友達を鼓のお稽古に誘った際、翻訳しづらいこの「お稽古」をどう説明するかと悩んだ。最初に浮かんだイメージは、武芸などの「道」に通じる「お稽古」。技能以上に精神の高みに達する意味合いが強いように思う。では、「練習」とどう違うのだろうか? 何事によらず辞書で解決できない問題は、人に聞いてみ

お稽古と練習

ることにしている。さまざま能楽師の先生方に尋ねてみたら、表現は異なっても、考え方は同じ方向を示していた。確かに、フラクティース(実習)を通じて、エクセレンス(優秀)やアイコンフリッシュメント(遂行、たしなみ)を探し求めることは、重なる部分があるように思う。お稽古の場で、師匠や先輩は教えるのではなく、「伝える」のだ。本番ではない練習を80%の力で行うとしたら、お稽古は常に100%で

行うべきものだ。言い換えれば、普段の生活のすべてがお稽古に通じるという心構えが大切なだろう。それは日本古来の武道や芸能に限らず、自分が日ごろから、どんなマインドで物事に接しているか、というところだ。そのように考えれば、翻訳しにくい「お稽古」という概念はフランス人にも十分に通じる。このような話をさまざまな分野の人に尋ね歩いたことも、もしかすると、私にとっての「お稽古」かもしれない。

...遊歩道...

クリエイティブディレクター マニグリエ真矢

今年も成人式の季節が巡ってきた。私も来日して20年を経過、やっと、いろいろな物が見えてくるようになった。日本の成人式で連想するのは、やはり振り袖姿の女性たち。長い袂を垂らし、蝶々のように振る舞う姿は、さながら花畑で夢心地の気分には浸っているかのようだ。この季節に、来日した知人を街中に連れ出すと、必ずや夢中になって写真を撮り始める。「ビューティフル! トレッシュョリー!」。彼らは、初

振り袖の扉

々しい女性の斬新な髪形や組み合わせに、感嘆の声を上げながら、晴れ着姿にくき付けになっている。結婚したら袖を切って留め袖として着ることを昔ほど重んじる必要がなくなってきたいるのだろうか。振り袖は今や思い思いの演出を楽しむ衣装になりつつあるのかもしれない。いつの間にかウエディングドレスのように一度きりの晴れ着になり、華やかさも一層増したようだ。振り袖は、自分の若々しい姿を思い通りにデザインでき

るから、「楽しい! 着たい! 一度だけだから!」。そういう気持ちにさせてくれるのだから、伝統的な着物を身に着けるのとはおのずと趣が違っただ。だからといって、着物をはぐくんできた歴史や伝統をなおざりにすることはない。振り袖の特性を楽しみながら自分を自由にデザインすれば良い。その楽しみを体験していくうちに、新しい自分を見いだす扉がまた一つ増えていることに気づくに違いない。